

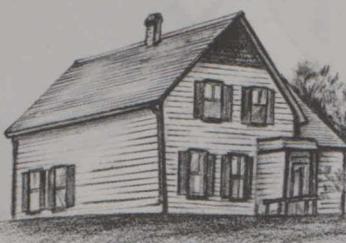
てあげられる。

プリンス・エドワード・アイランドは、セント・ローレンス湾の海流のために寒さが緩和されている上に、白い砂浜や、理などと、観光資源に富み、カナダの他の地域やアメリカ合衆国から、フェリー

や飛行機で年間六十万人をこえる観光客が訪れる。観光業は年商一億ドルの一大産業だ。プリンス・エドワード・アイラ

ンド国立公園は、国内で一番小さな国立公園だが、人気は二番目に高い。

P E I の "輸出品"



『赤毛のアン』の"緑色の切妻屋根の家"。

の中で最も有名なのは、ルーシー・モンゴメリーの『赤毛のアン』(原題は、『緑色の切妻屋根の家のアン』)をはじめとする一連の作品だ。作品はいまでも世界中で読まれており、その中に出てくるなつかしい土地を訪ねて、毎年何千という"アン・ファン"がやってくる。もちろん、キャベンディッシュにある"緑色の切妻屋根の家"は欠かせない観光名所だ。

一九六五年以来、シャーロットタウンでは「赤毛のアン」のミュージカルが毎夏開催されているが、これも原作に劣らず大人気を博している。場所は、シャーロットタウン建国会議の百周年を記念するため、各州が拠出した寄付金で建設された芸術センターである。

ニュー・ブランズウイック州 が公用語

面積	リチャード・ハットフィールド (進歩保守党)
首都	フレデリクトン
人口	七二二、三〇〇人 (八四年)

日本向けに魚介類

州民所得	七十二億ドル (八四年推定)
------	----------------

ニュー・ブランズウイック州は、ケベック州に次いでフランス系住民の割合が高く(三五パーセント)、ケベック州と共に英語とフランス語が共通語となつてゐる(英仏両語が公用語として定められているのは、連邦政府とニュー・ブランズウイック州だけ)。

その理由は、ニュー・ブランズウイックが、かつてアカディアと呼ばれていたフランス植民地の一部だったからである。

アカディア(アカディ)とは、"豊饒な土地"という意味である。この植民地は一六〇四年に設立されたが、一七一三年

に英國に割譲され、フランス系住民(アカディアン)の多くは追放されて米ルイジアナ州に移った(ルイジアナ州では、アカディアからやつてきた人々を"ケイジヤン"と呼ぶ。"アカディアン"が変形した言葉である)。アカディアンの一部は奥地に逃げ込んでひつそりと住んだ。

こうして、フランス系のアカディア人と、米国から渡ってきた英國系住民が共生する、現在の一言語社会へと発展したのである。

ニュー・ブランズウイック州の人口はおよそ七一万二千人。その四五パーセントは、セント・ジョン(四万五千人)など、八つの都市に住んでいる。

州の経済基盤は、林業、鉱業、漁業、ポテト栽培を中心とする農業、それに観光だ。

ニュー・ブランズウイック州は、世界でも有数の森林地帯で、面積のほぼ八五

パーセントはトウヒ、バルサムモミ、マツ

カニ、ニシン、タラ、カレイ、シシヤモ、マグロ、エビ……世界三大漁場のひとつグランド・バンクスを控えた大西洋沿岸は、魚介類の宝庫である。日本にも、ズワイガニ、ニシン(およびカズノコ)、シシャモなどを大量に輸出しているが、特にニューファンダミンド沖を中心に漁獲されるシシャモの対日供給はカナダがノルウェーを抜いて第一位、ズワイガニはアラスカに次いで第二位だ。

そのほか、量は比較的少ないが、日本は甘エビ、ヒラメ、オヒヨー、それにカラスガレイなどの底魚も入荷しているし、一頭三百キロから四百キロもある本マグロも空輸されている。日本のレストランでお目にかかるアメリカン・スタイルのロブスターも、ほとんどがカナダ大西洋産である。

今後期待されているのは、ウニやツブガイ、それにマダラである。マダラは、日本人の口にもよく合う。

すでに外食チーンがわずかながら利用しており、これから次第に入荷が増えるものと思われる。また大西洋沿岸は、セント・ローレンス川河口一帯を中心に、世界最後のウニの宝庫といわれており、そのウニが日本でシンゲネに使われる日も、そう遠くないだろう。